

2017 年度  
「教員研修会」  
「学外 FD 関連研修会 参加支援」  
報告書

佛教大学 教育推進部 教育推進課



『2017年度「教員研修会」「学外FD関連研修会参加支援」報告書』発刊にあたって

教育推進機構長

西川 利文

このたび、2017年度のFD研修に係る活動をまとめた本報告書を発刊することとなりました。

昨今求められている教育の質保証は、公正な成績評価なしに実現することはできません。しかし、その重要性を認識しつつも、実践となるとなかなか思うようにいかず、悩んでおられる先生方も多いのではないのでしょうか。毎年開催するFD研修のアンケートからも成績評価への悩みや難しさへのご意見は多くいただきます。

そこで2017年度も2016年度に引き続き、「成績評価」をテーマに研修会を開催し、多くの先生方にご参加をいただきました。2016年度は学内の5名の先生方に事例報告をいただきましたが、2017年度は京都大学の山田剛史先生をお招きし、具体的な評価の実践方法に加え、評価をいかに学生の主体的な学びにつなげていくかをお話しいただきました。成績評価の定義の確認から始まり、ワークショップも行っていただきました。ワークショップは教員内で評価に関する悩みを共有した後、課題（レポート）の成績評価を行うものでしたが、同じ課題でも教員間で大きく評価のバラつきが出たようで、改めて公正な評価の難しさを実感されたことと思います。しかし、山田先生のお話にもありましたように、公正な評価をすることは学生の学習の指針にもなり、主体的な学びを引き出すことにつながっていくのです。適切な評価やフィードバックを行うことにより、学生のモチベーションを維持し、大学での学びを能動的に捉えてもらうようにしなければなりません。この研修をきっかけに、「評価」という作業を単に学生に「成績を与える」作業とはせず、「学びを促進する」作業と捉え、正しい成績評価の実践に取り組んでいただくことを切に願っております。本報告書を実践にお役立ていただけますと幸甚です。

また、上記の研修会のほかに教育推進課では、学外の研修への参加費、交通費を助成する「学外FD関連研修会参加支援」も引き続き行いました。例年、利用者は10名前後で推移していますが、さらに多くの先生方に学外の研修会に参加して、他大学の先進的な取り組みを持ち帰っていただき、ご担当の授業等に反映していただきたいと思います。

最後に、教育推進課では今後も継続してこのような研修会を実施し、FD活動を推進していきます。活動への先生方のご理解、ご協力をよろしくお願いいたします。



## 目次

2017 年度教員研修会 ----- 3

2017 年度 FD 関連研修会 参加支援報告書 -----29



# 2017 年度教員研修会



## 2017年度 教員研修会

### 【開催概要】

日 時：2017年9月13日（水）13：30～15：30

会 場：常照ホール（紫野キャンパス 成徳常照館5階）

N1-741教室（二条キャンパス 1号館7階）※中継

テーマ：「成績評価と質保証」

講 師：山田 剛史（京都大学 高等教育研究開発推進センター/大学院教育学研究科 准教授）

司 会：西川 利文（教育推進機構長）

参加者数：147名

### 【講 演】

#### 1.本講演の内容

～主体的な学びを促す学習評価の方法～

- ・学習評価の背景を理解する

学習評価が、学生の主体的な学びに果たす役割を理解する

- ・学習評価の基本を身につける

学習評価が持つ組織的、個人的問題を共有し、解決策を見出す

- ・学習評価を実践する

3地点の学習評価のタイミング、方法などを知り、使えるアイデアや技法を知ってもらう

- ・学習評価を体験する

学習評価のパフォーマンスを実践することで、有効性を実感し、自身の授業に活かす

#### 2.なぜ、成績評価をしなければいけないか？（背景を理解する）

昨今、教育の質保証、質的転換が言われている。18歳人口の減少、経営、グローバル化など大学をとりまく環境や大学生が変わってきた。大学生に求められる能力に、今までの大学教育とは異なる側面が期待されるようになってきた。これまでであれば「大学でどんな知識を身に付けたか」が問われたが、「大学でどんな力を身に付けることができたか」が求められるようになってきた。大学で身に付ける力が社会に出た時に、どれくらい有効性があり、通用するのか、そういう視点から身につけさせる能力が多様化してきている。その求められる能力の多様化をきっかけにして、大学の教育をどのようにドライブシフトさせていけばいいか考えた時に「質的転換」という話になる。例えば、その求められる能力を、大学のディプロマポリシーに反映させ、具現化していき、それが大学のドライビング・フォースになる。これまではまず授業があって、それを束ねてカリキュラムと呼ぶ比較的ボトムアップのロジックでカリキュラムが組まれてきた。そうではなく、これからはそもそも大学生がどのような力をつければ学位を与えるのにふさわしいか、そのためにはどん

なカリキュラムが必要か、そのカリキュラムを構成するためにはどんな授業が必要かとさかのぼって考えていく。これらを具現化するために、アクティブラーニングなどの方法がある。

そして、大学で身につけるべき力が身につけているかを検証し、その検証をもとに改善していくことが求められる、PDCA サイクル（内部質保証）へとつながっていく。欧米諸国では何十年もかけてやってきたポリシーの作成やカリキュラム策定を、日本は十数年で様々なことを同時にやらなければならない状態になっており、評価疲れなども起こっている。さらに、21 世紀の教育（カリキュラム）には主軸（知識）に加え、4C（創造性、批判的思考、コミュニケーション、協同性）と言われるスキルの部分、あるいは人間性（倫理観、勇気、レジリエンス、リーダーシップなど）、それらを統合して現場に応用していくような、自分を成長させていくような考え方も含めたメタ学習が求められている。このようなカリキュラムを実現するには、個人の授業でできることには限界があり、組織的に取り組むことが必要である。

### 3. 学習評価の定義・意義

私は、学習評価を「学生の学習を成功に導くために、学習実態を把握し、適切なフィードバックを行い、学習活動の成果を学習目標に照らして評価する教育活動」と定義している。

キーワードとしては、「実態把握」「フィードバック」「評価」の 3 つがある。「実態の把握」は、授業の始めから終わりまでの様々な局面で、学生の学習実態を把握するということ。「フィードバック」は、実態を把握したうえでの何らかのレスポンス。フィードバックは不可欠だが、毎回となるとかなり大変な作業であるので、うまくやる必要がある。「評価」は、学習活動の成果を学習目標に照らして最終的に評価することである。

できない学生も含めてどのように指導していくか。授業に出席させ、寝ずに 90 分受講させる。このような問題を解決する方法にアクティブラーニングもあるが、学習評価も一つの方法である。アクティブラーニングや学習評価は、「STUDENT SUCCESS」のためにある。学生はいかに単位がとれるかをしっかり確認している。つまり、学習の評価に目が向いているので、それを逆手にとって、どのように評価するのかを教員が学生にしっかり示す。しっかりとした授業（学習評価）をすれば、厳しくても学生の授業への評価は低くならない。ただ厳しいだけの授業では、学生の評価は低くなる。学生の質を高められているかどうかには学習評価の意義がある。

### 4. 学習評価の政策上の課題

授業時間外の学習時間が少ないと言われるが、これを解決するためにあるのが、CAP 制度である。しかし、実際余った時間を授業時間外の学習にあてるとは限らず、GPA 制度とセットで考えないとうまく機能しない。それを実践するため、単位の実質化、質保証を目指して、124 単位修得だけでなく GPA 値を卒業要件に加えた大学があったが、うまくいか

なかった。日本では理解を得にくい状況である。学内の戦略として GPA 制度を使うことで、教員も学生も、ただ授業をうければ単位がもらえるわけではないと理解する必要がある。そのほか反転授業で授業外の学習時間を増やし成功した事例もあるが、一部である。大学としてどう動いているか客観的に把握する意味でも GPA は優秀な仕組み。しかし、ただ導入すればいいわけではなく、どう活かすかの制度設計が重要になる。

## 5. 学習評価の実践上の課題

例えば、同一科目を複数教員が担当した場合に、評価がばらつくという問題がある。ばらつくのはいけないのか？重要なのはどのような経緯（手続き）でその評価に至ったかを説明できること。これまでは科目に合格していれば、成績評価の経緯はあまり問題にならなかったが、GPA 制度が導入されると留学などにその評価が響くため、大学として（評価のばらつき問題など）真剣に取り組まなければならない。

シラバスを統一するだけでなく、どのような評価基準にするかを共有することが大切である。成績調整会議などでさまざまな議論をし、そして次の担当者にそれを引き継ぐこと。これらは認証評価のためだけでなく、学生のモチベーションを下げないために必要であると考えられる。

## 6. 学習評価の基本を身につける

### \*\*ワークの実施\*\*

学生への評価で気になっていることを用紙に記入し、班内で発表をする

全ての学習評価（到達目標）を明確化する。まずはシラバスから。ディプロマポリシーと到達目標の関係性、次に評価方法との対応関係を確認し、具体的に書いていく。そして、どのように評価するかを授業の初めで明示する。ただ、可視化を進めると不合格者が多く出てくるという事実がある。落とすために、きちんと評価していることを説明できることが重要である。

## 7. 学習評価を実践する

学生の評価については主に①診断的評価（授業の開始前、初回の授業時）、②形成的評価（授業期間中）、③総括的評価（授業終了時）の3種類があるが、通常成績評価と呼んでいるものは「総括的評価」である。学生の理解度を確認することもなく授業を進め、最終の評価で全く理解できていないことが判明し、不合格者を出すような授業はよくない。そもそもどんな学生が授業を受けており、その学生らはこれまでどのような授業を受けてきたか、どれくらい基礎知識があるのか、モチベーションがあるのかを事前知っておく。その学生が15回の授業を経て、最終的にどこに到達するかを設定するためにも診断的評価は必要である。ただし、それだけでは不十分で、ちゃんと授業が理解できているか、その都

度確認していく、つまり「形成的評価」を行っていく必要がある。理解できていないまま授業を受け続け、最終的に友達にノートを借りて、試験に臨むようなことは避けさせなければいけない。それを防ぐためにも形成的評価を導入する。

最初から意欲的な学生がとればよいが難しい。1年生の前期でつまずいてしまい、ドロップアウトしてしまう学生が最近増えている。1～4年まで、15回の授業でも入口・中身・出口があり、4年間のモチベーションを維持することが非常に重要である。学生ができてい、できていな ということを経験でジャッジするのではなく、あくまでエンカレッジしていく必要がある。今これができていないけど、できるようになる必要があるということに学生にフィードバックしていく。そうしながら最終的に単位がとれたか、とれなかったに終始せず、授業でできなかったことをもっとやってみたいと思ってもらう。それが評の最大の目的である。

様々な評価の方法があるが、学生が授業にエンゲージメントすることが重要。授業の振り返りを授業時間外にするという方法もある。授業時間だとあまり考えずにさっと回答してしまうが、授業時間外に行なうと考える時間も取れるうえ、授業時間も削らなくてもよい、授業外学習も増やせるというメリットがある。ICT をツールとして使用するという方法もある。フィードバックすることが、それらを見ていることの学生への証明となるので、できる範囲でフィードバックしていく。

## 8.学習評価を体験する

### \*\*ワークの実施\*\*

学生が書いたレポートの採点（ルーブリックの体験）

#### 【内容・手順】

配付した文章（レポート）を30点満点で採点してもらう。初年次教育科目（1回生必修）で作成したという設定のレポート。

各自でレポートを採点する→班内で点数を共有する→評価の観点を話し合う（なぜその点数にしたのか）→評価の観点を3つ出（3つ以上でもよい）。各々の評価を出しあい、評価の優先項目を決めていく。



このような作業を経て、評価基準を作っていく。そして、学生にも評価の基準の表を配っておくと、学生自身が事前にチェックすることもできる。さらに、TA（ティーチング・アシスタント）、SA（スチューデント・アシスタント）を巻き込んで作業をすれば、教育効果も持たせられる。評価の基準観点をしっかり見せないで学生モチベーションが下がってしまう。評価基準を明らかにし、学生自身に自分をモニタリングさせる。

評価は、こういうことができるようになってほしいという教員の学生に対する、宣言、約束でもある。評価基準を開示することにより、感情に振り回されず教員も公正な評価ができる。また、学生にフィードバックすることで、具体的に何が足りなかったかを学生も知ることができる。学習評価は成績を付けるだけでなく、それを通して学生の主体的な学びを引き出すことができるのである。

## 主体的な学びを促す学習評価の方法

山田 剛史 / Tsuyoshi YAMADA, Ph.D.

京都大学 准教授

高等教育研究開発推進センター / 大学院教育学研究科

Website :

1

## 山田 剛史 (Tsuyoshi YAMADA) のプロフィール



【生誕】1977年12月大阪市。【学歴】関西外国語大学外国語学部、大阪教育大学大学院教育学研究科修士課程、神戸大学大学院総合人間科学研究科博士後期課程修了。神戸大学博士（学術）。

【職歴】京都大学高等教育研究開発推進センター教務補佐員（2005.4-2006.7）、島根大学教育開発センター講師・准教授・副センター長（2006.8-2011.3）、愛媛大学教育・学生支援機構教育企画室准教授・副室長（2011.4-2015.3）を経て、現在、京都大学高等教育研究開発推進センター / 大学院教育学研究科准教授（2015.4）。

【学会関係】高等教育質保証学会評議員、大学教育学会代議員、初年次教育学会理事、『大学教育学会誌』編集委員会幹事、日本青年心理学会研究委員、高等教育開発協会正会員。

【社会活動】文部科学省「大学教育再生加速プログラム」専門委員、他大学のGP・AP等外部評価委員、東山中学・高等学校学習力強化プロジェクト特別委員など。

【受賞関係】大学教育学会会長特別賞（2017.3）、島根大学優良教育実践表彰（2010.7）。

【専門】青年心理学（大学生研究、自己形成論）と高等教育研究・開発（質保証、FD、IR、学習成果アセスメント）。

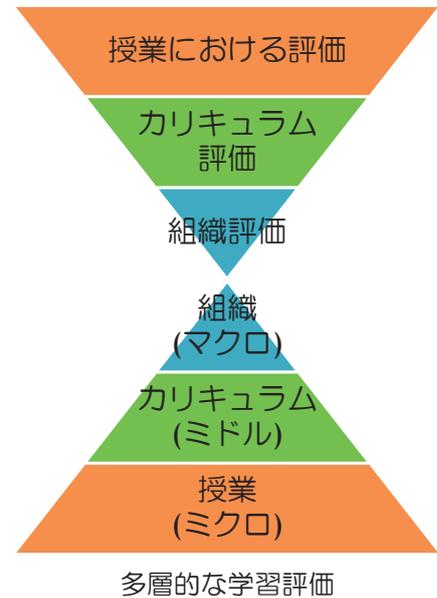
【テーマ】大学生の学びと成長を促す教育・学習環境のデザインと評価。

【主な著書】『生成する大学教育学』（2012年、ナカニシヤ出版、分担）、『大学のIR Q&A』（2013年、玉川大学出版部、分担）、『学生と楽しむ大学教育—大学の学びを本物にするFDを求めて—』（2013年、ナカニシヤ出版、分担）、『新・青年心理学ハンドブック』（2014年、福村出版、分担）、『大学のFD Q&A』（2016年、玉川大学出版部、執筆）、『大学生の主体的学びを促すカリキュラム・デザイン—アクティブ・ラーニングの組織的展開にむけて—』（2016年、ナカニシヤ出版、編著）、『シリーズ大学の教授法 第4巻 学習評価』（2018年春、玉川大学出版部、編著）など。

2

## 今日の内容

1. 学習評価の背景を理解する
2. 学習評価の基本を身につける
3. 学習評価を実践する
4. 学習評価を体験する

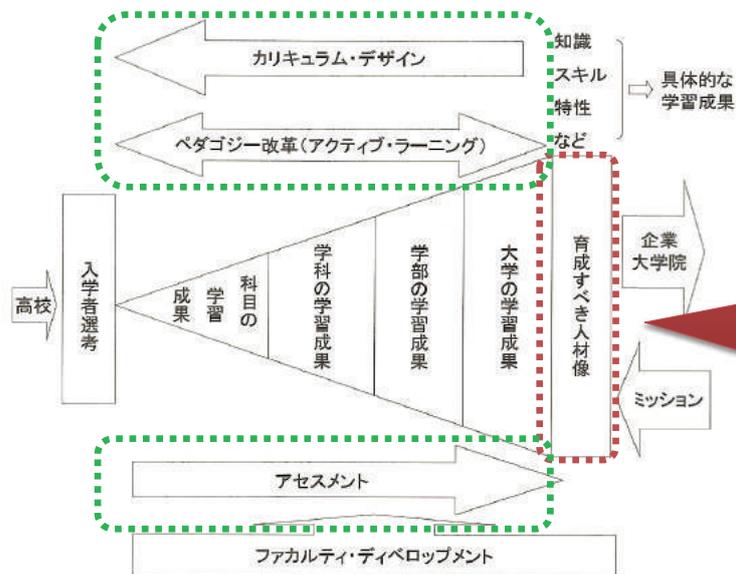


3

### 1. 学習評価の背景を理解する

4

## 求められる能力の拡張と教育の質的転換



逆向きのカリキュラム設計  
(川嶋, 2008; ウィギンズ&マクタイ, 2012)

改革の起点(基点)  
「ディプロマ・ポリシー」

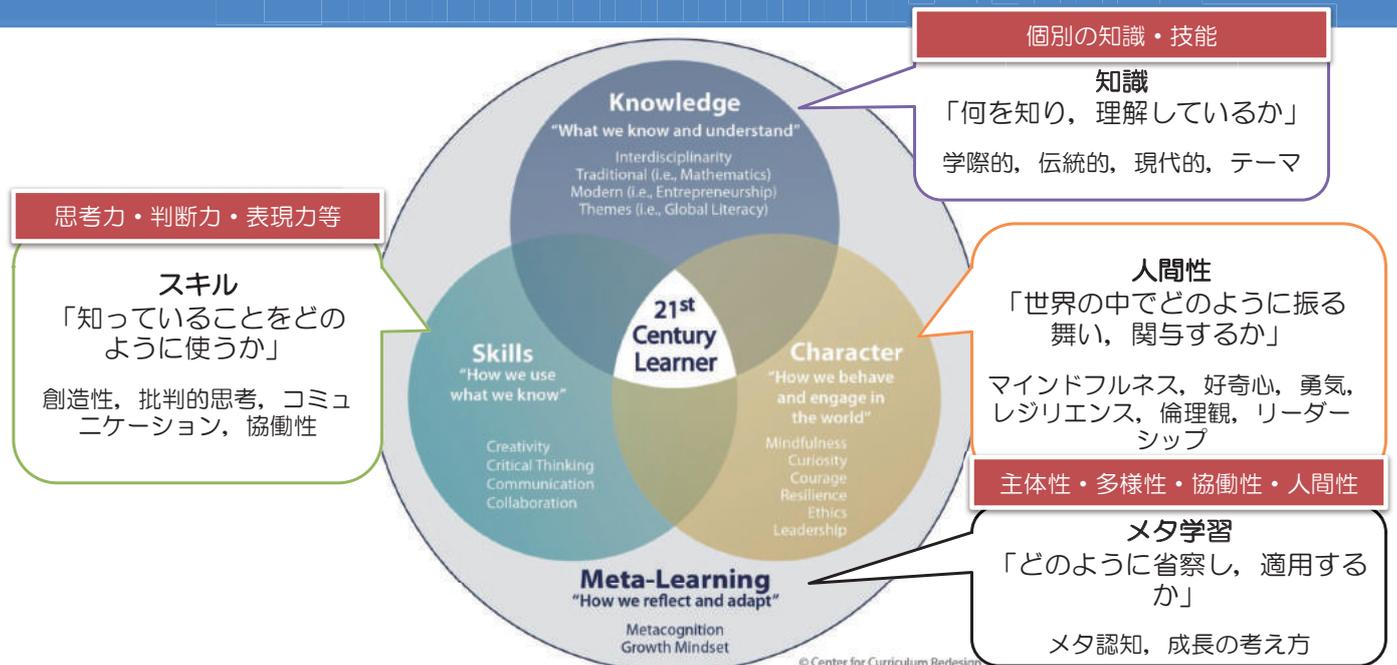
<参考>  
「社会人基礎力」(経産省)  
「学士力」(文科省)  
「参照基準」(日本学術会議)  
「キー・コンピテンシー」(OECD) など



学位プログラム(授与される  
学位の専攻分野ごとの入学から  
卒業までの課程)

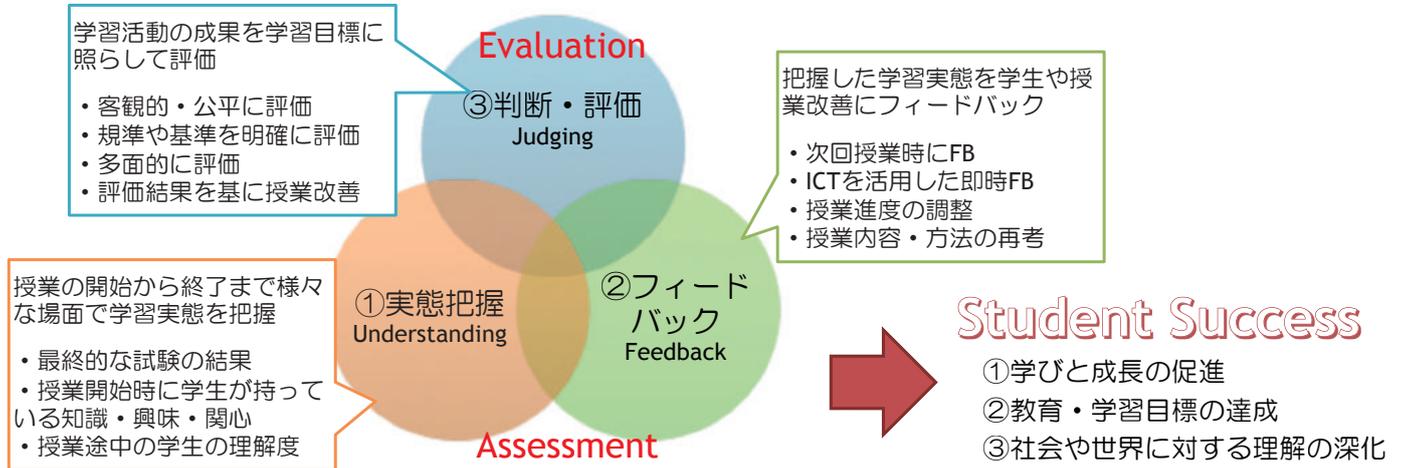
図-2 ラーニング・アウトカムズを重視した「学士課程」教育の構築

## 21世紀の教育(カリキュラム)に求められる能力



## 学習評価の定義

学習評価とは、学生の学習を成功に導くために、学習実態を把握し、適切なフィードバックを行い、学習活動の成果を学習目標に照らして評価する教育活動。



7

## 学習評価の意義

### 1. 学生の学習の質を高める

知識修得＋汎用的能力獲得，認知的側面＋態度・技能面  
＜実践上の問い＞

「この評価は、学生の学習の質を高められているだろうか」「どのような評価を行えば、学生の学習の質を高めることができるだろうか」

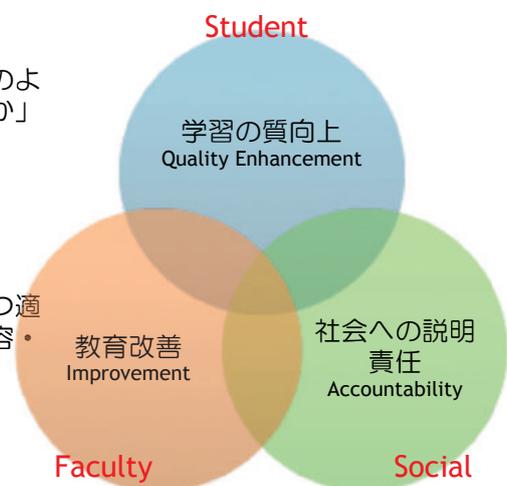
### 2. 教員の教育改善を促す

経験値＋根拠に基づく改善  
＜実践上の問い＞

「授業を通じて得られる能力（期待される学習成果）が具体的かつ適切に設定・提示できているか」「学生が目標に到達するための内容・方法は適切に選んでいるか」

### 3. 社会に対する説明責任を果たす

学習成果の多面的な測定・評価と可視化



8

## 学習評価の政策上の課題

### ■ 学習の「量」の向上

#### <CAP制>

単位の過剰登録を防ぐため、1年間あるいは1学期間に履修登録できる単位の上限を設ける制度

⇒CAP制の導入大学・・・657大学（84.3%）\*



### ■ 学習の「質」の向上

#### <GPA制度>

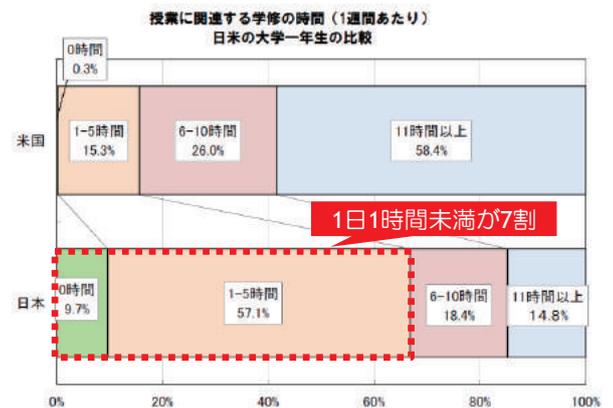
授業科目ごとの成績評価を、例えば5段階（A, B, C, D, E）で評価し、それぞれに対して、4, 3, 2, 1, 0のように数値（グレード・ポイント：GP）を付与し、この単位あたりの平均（グレード・ポイント・アベレージ：GPA）を出して、その一定水準を卒業等の要件とする制度

⇒GPA制度の導入大学（学部）・・・578大学（78.2%）\*

⇒準備学修に関する具体的な指示・・・416大学（67.6%）\*

⇒準備学修に必要な学修時間の目安・・・93大学（15.1%）\*

単位の「意味の」  
実質化



\*は、文部科学省「大学における教育内容等の改革状況」平成26年度版より

9

## シラバスにおける授業時間外学修の明示例（金沢工業大学）

0125-01

授業の運営方法や運営方法や  
予習・復習時間の目安を明示

CLIP学習プロセスについて

一般に、授業あるいは課外での学習では：「知識などを取り込む」→「知識などをいろいろな角度から、場合によってはチーム活動として、考え、**確論し、創造する**」→「修得した内容を表現、発表、伝達する」→「総合的に評価を受ける、**GoodWork!**」：のようなプロセス（一部あるいは全体）を繰り返し行いながら、応用力のある知識やスキルを身につけていくことが重要です。このような学習プロセスを大事に行動ください。

回数 日付	学習内容	授業の運営方法	学習課題(予習・復習)	時間(分)
1,2 /	・チーム役割分担を決定する ・学習目標を理解する ・学習支援計画書、本科目の授業概要を理解する ・問題に対する技術者としての取り組み方の概要を理解する	・講義 ・チーム活動	・ウィークリーレポートの作成 ・チーム編成用紙等の仮作成	30
3,4 /	・チーム活動の進め方と意義を理解する ・技術者の社会的責任を意識する ・パワーポイントによるスライドの作り方を理解する ・ミニプロジェクトの成果を発表する ・合意の形成方法を理解する	・講義 ・口頭発表 ・チーム活動	・ウィークリーレポートの作成	30
5,6 /	・メインテーマを理解する ・プロジェクトテーマ候補を見つけ出す方法を理解し、プロジェクトテーマの候補を見つけ出す	・講義 ・チーム活動	・ウィークリーレポートの作成 ・プロジェクトテーマ候補を見つけ出し一覧表を作成	60
7,8 /	・プロジェクトテーマの評価方法を理解する ・プロジェクトテーマを選定する ・プロジェクトテーマ選定報告書を作成する	・講義 ・チーム活動	・ウィークリーレポートの作成 ・能力の向上自己評価(学期初め) ・口頭発表1の準備 ・チーム編成用紙等の完成	90

## 学習評価の実践上の課題（一例）

### Q1. 能力（の全て）を本当に評価できるのか？

A1. 人間の持つあらゆる能力を評価することはできない。限界を知りつつ、可能な限り基準を明確にして、多面的な方法を用いて評価するより方法はない。評価を絶対視せず、基準が明確になることで見えなくなることにも注意。また、学習評価に万能な方法、唯一の特効薬はない。

### Q2. 集団と個人の能力をどう評価するか？

A2. アクティブラーニングの進展で生じる新たな問題（フリーライダーや連帯責任による不公平感など）。学習活動への貢献度などを自己評価やピア評価を用いたり、毎授業後のアウトプットをミニッツ・ペーパーの形で課したり、最終的に個人レポートを提出させたりするなど。

### Q3. 評価の厳密性と効率性をどう両立させるか？

A3. 厳密にすれば良い教育につながるのはある意味当たり前。実際には、一人で多数の科目を担当していたり、クラスサイズが大きかったり、授業準備にも時間がかかったりと負担の問題を無視できない。ICTの活用やTA・SAの活用、評価を行うことが効果的なポイント（初回や中間期など）や指標を定めて必要以上の評価活動は控えるなど。

11

## 2. 学習評価の基本を身につける

12

## 学習評価の考え方・サイクル

「逆向き設計」の考え方（ウィギンズ&マクタイ, 2012）



学習成果（到達目標）  
の明確化から出発する

### 学習評価のサイクル（Barkley & Major, 2016）

ステップ1	学生がどのような能力を身につけるかを明らかにする
ステップ2	何ができれば能力が身についたことになるかを明らかにする
ステップ3	適切な評価の方法を選ぶ
ステップ4	授業の実施後に評価を行う
ステップ5	評価の結果を分析し学生にフィードバックする
ステップ6	学生が獲得すべき能力と実際に獲得した能力を比較して授業を改善する

13

## 到達目標と評価方法の関連性を明示する

シラバスや授業  
で学生に明示！

### 初回授業で目標と評価を説明する利点（Davis, 2009）

・授業の目的、成績評価の方法、課題の内容など授業の重要な要素について、学生が深く理解して取り組めるようになる。

・成績評価の詳しい情報を得ることができ、初回の授業で学生の不安がなくなる。

・教員が学生に期待する成果と教員の授業に対する熱意を効果的に伝達できる。

・教員と学生の双方が学習に真剣に取り組むという、良好な授業の雰囲気をつくることができる。

・授業の進行途中で、学生が自分の学習を自己評価し、目標に近づいていることを確認しやすくなる。

例）現代社会と教育「大学生の学びとアイデンティティ形成－大学生生活をサバイブする－」（山田）

達成目標	評価対象	領域	配点	1.チェック	2.リフレク	3.グループ	4.学生生活	5.最終レポ
				スト (6回)	ションシート (8回)	ワーク (2回)	ジョン (1回)	ート (1回)
				15点	28点	25点	7点	25点
1.大学・大学生の変遷や意義について説明することができる	知識	28点	○ (15)	○ (8)				○ (5)
2.大学生としての自覚を持ち、学生生活のビジョンを描くことができる	態度	12点				○ (7)		○ (5)
3.主体的・積極的に授業や授業外活動に参加することができる	態度	27点		○ (12)	○ (10)			○ (5)
4.論理的・批判的に考え、それを文章や口頭で他者に伝えることができる	技能	18点		○ (8)	○ (5)			○ (5)
5.他者の意見を尊重し、グループ活動を円滑に進めることができる	技能	15点				○ (10)		○ (5)

Page 14

## 評価基準を明確化する

### 評価規準と評価基準

#### 評価規準 (criterion)

設定した学習目標に対応して「何について評価するのか」(ものさし)

#### 評価基準 (standard)

設定した評価規準を「どの程度到達しているのか」(目盛り)

#### 評価基準を明確にする利点 (Walvoord & Anderson 1998/2010)

- ・ 成績評価の時間を短縮できる。
- ・ 一貫した公平な成績評価ができる。
- ・ 教師が学生になにを期待しているかを伝えることができる。
- ・ 教える内容を明示できる。
- ・ 授業の内容と過程との基本的な関係を明らかにできる。
- ・ 学生は学習目標を理解しているので、学習への参加を促進できる。
- ・ 学生同士で学習計画について建設的な意見交換を促進できる。
- ・ 一緒に指導している教員やアシスタントの間で、同じ基準でレポートを評価できる。
- ・ 関連する授業を担当している教員同士で、お互いの評価基準を検討できる。

例：学習目標「実験を適切に行うことができる」

評価規準…「実験器具を準備できる」「仮説や要因計画を立てることができる」「実験器具を操作できる」「実験結果をレポートにまとめることができる」など

評価基準…「実験器具を操作できる」

基準A「一人で10分以内に使用する状態にできる」

基準B「友人の力を借りれば10分以内に使用する状態にできる」

基準C「一人で10分以内に使用できる状態にすることができない」など

15

## 評価主体を明確化する

当該授業の内容に熟知しており、その中で重要と思われる事項の理解度を測るため課題やテストなどを実施し、学生を評価するために必要な情報を収集する。

正解の決まっている問題であれば、評価にプレジが生じることもないが、レポートやプレゼンテーション、グループワーク、実験・実習など、必ずしも正解が1つではなくさまざまな反応が考えられる場合には注意が必要。

教員が授業における学習成果の評価材料として用いることも可能だが、学生自身に評価方法を身につけさせるためにも有用。

自由記述させる方法、記述項目を指定して書かせる方法、チェックリストによる方法、評定尺度による方法、ループリックを用いる方法など。学生同士のピア評価もフィードバックの機会を多く与えることができるという点で有効な手段。

教員

学生

第三者

体験学習やインターンシップにおいては、受け入れ先の担当者が評価を行う場合がある。担当者は、学習すべき内容やその領域において専門性を有し、実践経験が豊富。

そのため、担当教員とは異なる視点から評価に資する情報を収集することができる。

何より、こうした活動・評価を通じて、大学での授業と社会をつなぐという点において重要な意味をもつ。

学生は卒業後のイメージを具体化でき、学習への動機づけを高めることにもつながる。

16

### 3. 学習評価を実践する

17

#### 学習評価のタイミング

##### 3地点の学習評価で自律的学習を促進

- 
- ① **診断的**評価（授業の開始前，初回の授業時）  
学習者のレディネス（既有知識）を把握（プレイスメントテスト等）
  - ② **形成的**評価（授業期間中）  
学習者の理解度や目標到達度を把握（小テストや中間テスト等）  
＊結果の迅速なフィードバックでモチベーションを高める（ICTで効率化）
  - ③ **総括的**評価（授業終了時）  
期末試験やレポート，これまでの学習成果を含めて総合的に判定を行う

学習の評価（of），学習のための評価（for），  
学習としての評価（as）を使い分ける

18

## 学習評価のタイミング

教員は学習評価を通じて、

- ・達成感を感じさせる、達成したいと思わせる（達成的動機づけ）
  - ・授業内容に興味を抱かせる、知りたいと思わせる（内発的動機づけ）
  - ・頑張ったら、達成したらいいことがあると感じさせる（外発的動機づけ）
- 必要がある。



シラバスなどで学習目標を明瞭かつ具体的に示し、ゴールをイメージさせる

診断的評価

学生が何が理解できていて、何が理解できていないのか、を把握・理解させる

頑張りが成果として表れるような（協同）活動やパフォーマンス課題を組み込む

形成的評価

次に何が必要か、どうすれば学びが深められるかをフィードバックする

学びの成果を確認し、ふり返り、次の学びへつなげる

総括的評価

19

## ①学習前に評価を行う

### 診断的評価（Diagnostic Assessment）

- ・最適な学習の提供を目的として、学習者を診断するために行われる評価。教員が授業前に学生の能力や既有知識を把握して、授業内容・計画を調整するために行う評価。
- ・事前に学習者の学習の準備状態（レディネス）を把握することと、その情報をもとに学習計画を設計することが目的。
- ・具体的には、これから授業で扱おうとする知識について、受講生が実際どの程度すでに知っているのか確認・把握するための受講前アンケートや基礎学力テスト、習熟度別にクラス分けするためのプレイスメントテストなどが該当。

### 診断的評価の技法例（Learning Assessment Technique (LAT) , Barkley & Major 2016)

#### 1. 予備知識調査（Background Knowledge Probe）

新しい単元や学習モジュールを教える前に行う、学生の基礎的な知識や、基本的な準備の有無を測るための簡単なアンケート。文章の真偽を問う問題や授業で扱う主要なキーワードの定義を書かせる問題など簡単に行える質問を用意し、それらの解答に対する自信の有無を評定させたりする。

20

## ①学習前に評価を行う

### 2.ファースト・デイ・ファイナル (First Day Final)

学生は学期始めに期末試験に出る問題に似た試験を受ける。この試験に点数はつけず、最も易しかった問題と難しかった問題を特定する。学期末に期末試験を行い点数をつける。両者の結果は、学期中に学んだことや達成したことを評価するために参考にする。

学期始めにゴールをイメージさせることによって、学生自身で取り組むべき課題が明確になったり、前後の得点が可視化・比較されることで動機づけを高めることにもつながったりする。

教員にとっても学生の理解度を把握した上で授業に臨むことができるというメリットがある。

### 3.学習目標リスト (Learning Goal Listing)

学生は学期や科目の始めに学習に関する目標を作成・リスト化し、優先順位の高い順に並べる。そして、科目の目標と一致しているかどうかをチェックする。なぜそのような目標をあげるのか、どうすれば到達できるか、到達するためにはどのようなサポート（人、場所、もの）が必要かといったことを考えさせたり、学生同士で書いた目標について伝え合ったり、書き方を学ばせ合ったりすることも効果的。

当該科目における自分の学習目標 (優先順位5番目まで書く)	自分の目標と科目 の目標との一致	
1.	Yes	No
2.	Yes	No
3.	Yes	No
4.	Yes	No
5.	Yes	No

21

## ②学習中に評価を行う

### 形成的評価 (Formative Assessment)

- 学習の改善を目的として、学習の形成発展段階で学習者の学習状況を把握するために行われる評価。教員が授業の途中で学生の理解度・到達度を確認して、今後の授業内容・計画を修正する必要があるか検討するために行う評価。
- 学習者の途中段階の理解度・達成度を把握すること、その情報をもとに残りの学習計画を修正すること、学習者に現状をフィードバックすること、そして、学習者に残りの学習の改善を促すことが目的。
- 具体的には、授業ごとの小テスト、中間テストや中間アンケートなどが該当。

### 形成的評価の技法例 (Learning Assessment Technique (LAT) , Barkley & Major 2016)

#### 4.クイックライティング (Quick Write)

自由に回答できる形式の質問を用意し、学生に限られた時間の中で答えを書かせる評価活動。今日の授業で最も印象に残っていることは何かを問う「ミニツツペーパー」や、もやもやしたこと、もっと勉強する必要があることは何かを問う「マディエスト・ポイント (混乱した点)」などもこの方法の応用。少ない時間で授業内容の理解度を学生自身が把握する上で効果的な方法。

22

## ②学習中に評価を行う

### 5. 入退出カード (Entry and Exit Tickets)

学生に読み物の課題や動画、講義などについて考えさせた後、索引カードに短い質問に対する答えを書かせる評価活動であり、主要な事柄や用語、概念、考えに対する理解度を測ることができるもの。

この方法は授業の中で扱ったものだけでなく、学生に課した課題に対しても用いることができる。たとえば、ある読書課題に対して、そこから学んだ3つの主要概念について書かせたり、現象Xが生じた原因を書かせたりする。教員は、カードを回収し正答率や理解度を把握する。

授業時間外学習を促す方法としても効果的。

### 6. 総合要因リスト (Comprehensive Factors List)

学生は、読書課題や講義、実例、実技、あるいは他の科目で経験したトピックに関連した要因をできるだけ多く考え、リスト化する。

個人でリストアップする以外にも、グループでリストを作成するのも効果的。

良かったリストについて学生に報告してもらったり、講義を行う前と後でリストの数や質について比較したりするのも効果的。

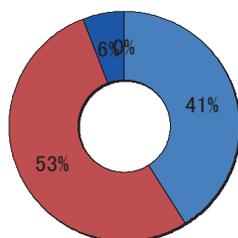
23

## ②学習中に評価を行う (事例)

★ICTの活用で評価活動を効果的・効率的に  
(左：クリッカー、右：REAS)

REAS

Realtime Evaluation Assistance System



1. 理解できている
2. ある程度理解できている
3. あまり理解できていない
4. 理解できていない

【質問】 調査票回答者数 55 / 設問回答者数 53  
大学の歴史や意義・役割について理解できましたか？

全く理解できなかった	0 (0%)
あまり理解できなかった	0 (0%)
ある程度理解できた	37 (69%)
きちんと理解できた	16 (30%)

無回答 2 (3%)

動画でも紹介しています↓  
[https://www.youtube.com/watch?v=0M\\_6-7IPXdk](https://www.youtube.com/watch?v=0M_6-7IPXdk)



24

## ②学習中に評価を行う（事例）

### ★収集した情報は即時フィードバック

（左：コミュニケーションシート、右：質問への応答・補足）

The image shows two screenshots from the 'tsuyoxi' platform. The left screenshot is a communication sheet with a header 'tsuyoxi ツヨキ' and text discussing a lecture on modern university theory. The right screenshot is a Q&A sheet titled '振り返りシートより' (From the reflection sheet) showing questions and answers about a lecture on '松大の一コマ (90分) の授業料' (A 90-minute lecture at Ritsumeikan University).

**tsuyoxi ツヨキ**

■■■現代大学論 第9講 (6/6) のコメントより■■■  
 ----今週のtsuyoxi的ベスト・コメント!----  
 ★★★今の大学生は、周りの友人や大学という組織、社会と  
 からこの傾向があったことは、今回の授業で知って驚いたか  
 分の興味を通して、何かかかわりが無いが、さぐっているよ  
 れないか) 中間テストの勉強会を開けば、みんな自然と集ま  
 分野について、ささやかだが何か話し合ったり、学生が開く  
 ある。こういう意味で、今は、かかわりをさぐっているのだ  
 つ：まさにアイデンティティの探求だね。それにしてもと  
 ないながらも) 創っているね。それが学年が上がっていっ  
 ング・コミュニティを創ってアイデンティティを探

**振り返りシートより**

質問への回答 (1/2)

補足1.松大の一コマ (90分) の授業料

A1. アバウトな数字で説明したので、ちゃんと調べました!

補足2. 病名の変更について

A2. 台詞のように変わります

Q1. 少しの睡眠で疲れが取れる  
方法はありませんか。

A1. ござらざるに驚かれ。

Q2. 運動性失語症と家庭内暴力で  
関係あるのですか。

A2. これ自体は脳 (ブローカ部) の機能障害が絡んでるけど、失語症の中には  
後天的なものもあって、DVが絡んでいるケースもあるね。

Page 3



25

## ③学習後に評価を行う

### 総括的評価 (Summative Assessment)

- 学習の効果検証を目的として、学習を総括するために行う評価。教員が学生の最終成績を判定するために行う評価。
- 学習に対して文字通り総括としての評価を行うこと、学習者に学習の結果をフィードバックすること、学習者に学習活動全体に対する振り返りを促すことが目的。
- 具体的には、期末テスト、最終レポート、可否判定などが該当。

### 総括的評価の技法例 (Learning Assessment Technique (LAT), Barkley & Major 2016)

#### 7. 学習概要 (Study Outlines)

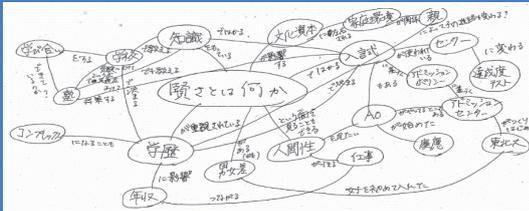
学生が授業で学んだ知識を、自分のために便利で意義のあるよう統合、整理するための手助けとなるもので、試験対策にとっても効果的。概要を書かせる際には、分量・体裁、内容・構成、評価の基準や配点の割合をあらかじめ決めておくことよ。たとえば、内容・構成として、a.要約、b.キーワード、c.例示といった統一的な枠組みを示しておくことで、効率的で適切な評価がしやすくなる。

26

### ③学習後に評価を行う

#### 8. コンセプトマップ (Concept Maps)

自身が学んだ、複雑な概念、手順、過程などに関する理解を伝えるための図表を書く。四角や丸は思考や考えを表し、それを結ぶ線は、その考え同士の関連性を表している。同様の方法としてはマインドマップがある。主に自身の思考の整理を行う目的で行われるマインドマップに対し、コンセプトマップは、概念間の関係性を示したりリンク語を用いて構造化したりと、学習の成果を外化するのに適している。



#### 9. eポートフォリオ (E-Portfolios)

電子化されたポートフォリオ上に、学期中に出された課題に対する提出物を集め、それぞれの提出物の重要性を説明するコメントを補充していく。eポートフォリオはさまざまな目標を実現することができるツールであるため、中心的な目的を定める必要がある。総括的評価のみならず、形成的評価でも活用可能なツール。

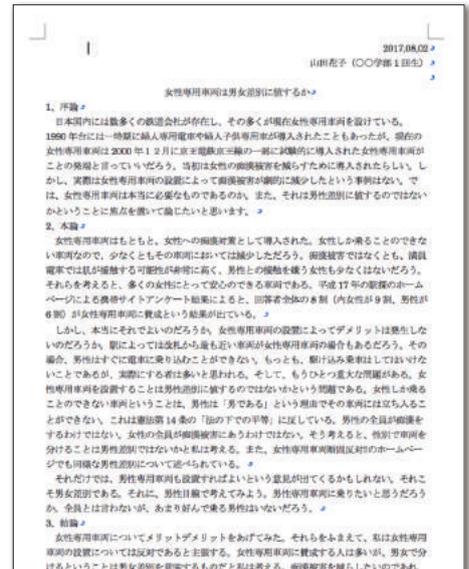
- 成長を記述する・・・授業の開始時や終了時など、学習を通じて変化した点などに焦点
- 最高の作品を紹介する・・・大学院への進学や就職を得るためといった将来計画に関わる自分の経験や成果などに焦点
- 学習成果を記述する・・・特定のベンチマーク基準を満たしているかどうかなど授業などで定めた基準に応じた成果などに焦点

## パフォーマンス評価を体験してみよう！

学生のレポートについて評価してもらいます。  
みなさんに与えられた持ち点は「**30点**」です。

### 学生への通知事項

- ①テーマ：身近な社会問題について
- ②分量：2,000字程度
- ③氏名、所属、タイトルを明記
- ④提出期限：2017年7月28日（金）17時
- ⑤授業の性質：初年次教育科目（1回生必修）  
担当教員：4名（オムニバス）



酒井浩二（2009）『論理性を鍛えるレポートの書き方』ナカニシヤ出版（pp.107-109）のレポート実例を元に筆者が改変。

## レポートの採点ルーブリックを作ってみよう！（規準5×尺度3）

			③	
①&②				
			④	

### 作業の進め方

- ①レポートで求められる「評価規準（観点）」を挙げる（☞ポストイットに書き出し／1枚に1つ）
- ②挙げられたポストイットを整理する（☞特に大事だと思う「5つ」を選出する）
- ③「尺度名（評語）」（3つ）を決める
- ④「評価基準」を、一番いい状態、一番悪い状態、その間の順に埋めていく（と作りやすい）

# ループリックとは

〔ループリックとは〕

- 「目標に準拠した評価」のための「基準」つくりの方法論であり、学生が何を学習するのかを示す評価規準と学生が学習到達しているレベルを示す具体的な評価基準をマトリクスで示す評価指標（濱名，2011）。
- 知識の定着度を測る客観テスト（多肢選択，正誤問題等）とは異なる，様々な学習活動（パフォーマンス）や汎用的能力を評価する方法として注目。



3

# ループリックの例（プレゼンテーション）

「プレゼンテーション用ループリック」（スティーブンス&レビ，2014，p.68）

	プロ級	合格	要改善	不合格	成績
内容	プレゼンテーションやその後の質問に対する回答は十分な（必要とされる以上の）内容理解に基づいている。	材料をしっかりとまとめたプレゼンテーションで，すべての質問に的確に回答できるが，詳細にというわけではない。	情報を十分に理解しておらず，情報が理解できていない。なにかには誤解もある。また，質問および質問への回答となった。	情報が理解できていない。なかには誤解もある。また，質問に正確に答えられない。	B+
構成	情報は論理的かつ興味を引く順序で提示され，聴衆は内容を容易に迎えることができる。	情報は論理的な順序で提示され，聴衆は内容を容易に迎えることができる。しかし，少し退屈である。	プレゼンテーションには大きな飛躍があり，内容を迎えるのは不可能ではないにせよ，困難である。	論理的な順序で組み立てられたプレゼンテーションではないので，聴衆はその内容を理解できない。	C
図表等	図表等は発表内容の説明に役立ち効果的である。	図表等は発表内容と関連している。	図表等は非常に少ない。あるいは発表内容との関連が薄い。	図表等は使われない。あるいは過剰である。	B
英語	綴りや文法上の誤りがない。	綴りや文法上の誤りは2個以内である。	綴りや文法上の誤りが3個ある。	綴りや文法上の誤りが4個以上ある。	A
話し方	明瞭で，正確かつ的確な話し方である。声量は大きく，楽に聞き取れる。容易に理解できる速さである。	はっきりと話し，ほとんどの語句の発音は正確である。声量は大きく，楽に聞き取れる。容易に理解できる速さである。	話し方が不明瞭である。主要な語句の発音が間違っていることが多い。声が小さい。あるいは速すぎて容易に理解できない。	口ごもった話し方をする。大半の主要な語句の発音を間違える。声が小さく，あるいは速すぎるため全く理解できない。	C
アイコンタクト	常にアイコンタクトがある。原稿を見ることは全くないか，最小限である。	アイコンタクトは持続的に行われるが，原稿を見るが多すぎる。	ときにはアイコンタクトがあるが，たいていは原稿を読んでいる。	アイコンタクトはなく，ずっと原稿を読んでいる。	B-

4

## 4. 学習評価を体験する

1

### レポートの評価基準，ルーブリックの例

〔一般的なレポートの評価基準（河野，2016）〕

- 執筆の倫理：剽窃，著作権の保護，プライバシー保護など
- 形式・構成面：論文の構成，引用の仕方，参考文献表や注のつけ方，字数制限など
- 内容面：論理性，実証性，論旨の一貫性，問いと結論の対応，立論の妥当性，立論の検討，独創性
- 表現面：読みやすさ，表現の豊かさ，段落の変え方，誤字・脱字・誤植など

	A	B	C
引用	信頼できる出版元や著者による文献やデータのみを引用している。5つ以上の文献と2つ以上の公刊統計を用いている。	文献の選択に改善の余地があるが、複数の文献を選択して引用している。	文献を十分に引用していないかったり、引用していることがわからないなど、引用の方法や分量に不適切な点がある。
論理構成	結論を得るまでの過程が明確で、複数の論拠や対立する論拠を示しながら、論理的に一貫した構成となっている。	論拠や対立意見の扱いに不十分な点もあるが、結論を得るまでの過程が論理的に一貫している。	結論を得る過程が明確でない。または、情緒的な記述による結論を示している箇所がある。
問題設定	問題に対して興味深い仮説を立て、自らの考えに基づく結論を示している。	意義や重要性に改善の余地があるものの、仮説を示している。結論がありふれたものであるものの、自らの考えをまとめている。	仮説や問題意識が不明確である。他者の意見を批判することなく、仮説や結論に用いている。
体裁	段落が適切につくられている。見出し、図表見出し、参考文献が正しくつけられている。指定された分量で作成されている。	段落や見出しの設定に不適切な箇所もあるが、概ね正しくつくられている。指定された分量を大きく逸れない範囲で作成されている。	段落や見出しの設定に不適切な箇所が多い。指定された分量を大きく逸脱している。
表現	専門用語を正しく使用している。文体が統一され、読みやすい文章で書かれ、表現の繰り返しが少なく、誤字脱字がない。	専門用語の使用に改善が必要な箇所もあるが、概ね正しく使用されている。読みやすさに改善が見られるが、誤字脱字が少ない。	専門用語を用いていなかったり、誤って用いている箇所がある。表現に間違いが多い。

スティーンズ&レビ（2014）p.128を参考に作成

2

## ルーブリックの利点 (山田, 2013)

### 〔ルーブリックの利点 (山田, 2013) 〕

1. どの程度まで努力すればどのような評価が得られるのか明示されており、学生自身の行動指針が明確になっている。
2. 学生が自らの学習活動を評価できる。
3. 結果だけではなく、プロセスも評価できる。
4. 採点開始から終了まで評価がぶれない。
5. 異なる人が評価しても同じ結果が得られる。
6. 教員による評価と学生による評価を比較検討できる。
7. 採点時間を短縮できるうえに、詳細なフィードバックが可能である。

「モデレーション」や「キャリブレーション」によって評価の妥当性を高める（本質的なFD）

近年では、機関・プログラムレベルの学習成果の評価に長期的ルーブリックが開発・実施されている（AAC&UのVALUEルーブリックなど）

3

## 引用文献

1. Barkley, E., & Major, C. (2016). *Learning Assessment Techniques: A Handbook for College Faculty*. Jossey-Bass.
2. Davis, B. (2009). *Tools for Teaching, Second Edition*. Jossey-Bass.
3. Fadel, C., Bialik, M., & Trilling, B. (2015). *Four-Dimensional Education: The Competencies Learners Need to Succeed*. Lightning Source Inc.
4. 濱名篤 (2011). 「ルーブリックとは」中教審大学教育部会 (2011年12月9日) 説明資料
5. 金沢工業大学学習支援計画書 (<http://www.kanazawa-it.ac.jp/syllabus/index.html>)
6. 川嶋太津夫 (2008). 「ラーニング・アウトカムズを重視した大学教育改革の国際的動向と我が国への示唆」『名古屋高等教育研究』8, 173-191.
7. 河野哲也 (2016). 「学生が自分で問いを立てるための授業デザイン」成瀬尚志編『学生を思考にいざなうレポート課題』ひつじ書房, pp.101-126.
8. 文部科学省「大学における教育内容等の改革状況」平成26年度版
9. 酒井浩二 (2009). 『論理性を鍛えるレポートの書き方』ナカニシヤ出版
10. スティーブンス, D.・レビ, A. (佐藤浩章監訳, 井上敏憲・俣野秀典訳) (2014). 『大学教員のためのルーブリック評価入門』玉川大学出版部.
11. Walvoord B., & Anderson, V. (1998/2009). *Effective Grading: A Tool for Learning and Assessment, Second Edition*. Jossey-Bass.
12. Wiggins, G., & McTighe, J. (2005). *Understanding by design (Expanded 2nd ed.)*. Alexandria, VA: Association for Supervision and Curriculum Development. (ウィギンズ, G.・マクタイ, J. (西岡加名恵訳) (2012). 『理解をもたらすカリキュラム設計ー「逆向き設計」の理論と方法ー』日本標準)
13. 山田剛史 (2013). 「学習の成果」中井俊樹・鳥居朋子・藤井都百編『大学のIR Q&A』玉川大学出版部, pp.96-98.
14. 山田剛史 (2013). 愛媛大学ICT活用事例3「クローズアップ先生」(Youtube, 2013年12月16日公開)

4



2017 年度 FD 関連研 会  
参加支援報告



2017年度学外FD関連研修会参加支援一覧

No.	開催日	企画名称等	主催	参加者所属
1	2017年5月18日	第8回教育ITソリューションEXPO ICT活用で一人ひとりに合う学びを実現～児童・制度の出来る！を引き出す～	リード エグジビション ジャパン	教育学部
2	2017年6月10日・11日	大学教育学会第39回大会 教養教育の再考	大学教育学会	歴史学部
3	2017年8月9日	ICT利用による教育改善研究発表会 教育の質的転換を目指すICT利用	私立大学情報教育協会	教育学部
4	2017年11月17日	大学教育再生加速プログラム(東京都市大学第1回APシンポジウム) 改めて、「社会に通用する」学修成果とその評価を考える	東京都市大学	教育学部
5	2018年2月15日	大学教育再生加速プログラム(AP)フォーラム テーマⅠ(アクティブ・ラーニング)・Ⅱ(学修成果の可視化)複合型 中間成果報告	東京電機大学	歴史学部
6	2018年2月16日	大学教育再生加速プログラム(テーマⅡ・Ⅴ)共同シンポジウム 高等教育に求められる質保証を考える—学修成果の可視化による教育改善と卒業時の質保証—	北九州市立大学	歴史学部
7	2018年3月7日	玉川大学APフォーラム2017「教職課程におけるアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化」 —学校現場における「主体的、対話的で深い学び」と教員養成段階におけるアクティブ・ラーニングを踏まえて—	玉川大学	教職支援センター

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	リード エグジビション ジャパン(株)
企画名称・テーマ	第8回教育ITソリューションEXPO (EDIX) ICT活用で一人ひとりに合う学びを実現～児童・生徒の出来る！を引き出す～
開催日・会場	2017年5月18日(木) 東京ビッグサイト 西ホール
参加者所属	教育学部 教育学科

### 参加報告

#### 【研修会の趣旨】

ICT機器の紹介と児童生徒にICT活用を普遍化させていく。

#### 【研修会の概要】

まず、セミナーに参加する前に、参考になった2つのブースの概要を述べる。

##### ○東京書籍

東京書籍のブースにて、Edu Town のサイトの紹介を受けた。「Edu Townあしたね」はキャリア教育・職業調べサイトである。このサイトで、「Edu Town図書館」をクリックすると、以下の8項目が閲覧できる。学校図書館で行う図書館利用者教育(オリエンテーション)や、司書教諭課程の「学校図書館メディアの構成」や「情報メディアの活用」でも授業教材としても活用できる。

・調べよう・NDCって何?・知りたいことをはっきりさせよう・インターネットで検索するとき・著作権について知ろう・調べるときに手がかりになる言葉・目次や索引の使い方・インターネット・情報を使うときの留意点

##### ○インクルーシブ教育におけるICTの利活用について 坂井 聡(香川大学)

ICTを使うことで集団での取り組み(活動)にプラスになる。例えば、タブレットPCは、障がい特性に応じて多様な入力手段で学習参加が可能になる。→誰もが認めることが重要。データがたまることで、本人の努力が評価される。学力が上がったという事実が結果として、自尊心を育てる。

##### セミナー

ICT活用で一人ひとりに合う学びを実現～児童・生徒の出来る！を引き出す～

つくば市立春日学園義務教育学校 教諭・特別支援教育コーディネーター 山口 禎恵氏

・読みの困難 Aの場合聞いて覚える力がある。パワーポイントで音声の挿入→当該学年テストで、60点以上はキープできるように。

A 「僕だけ違ったら、みんなに障害者だと思われるからいやだ！」

タブレットで 5分聞き(和太鼓ソフトで音声再生)、テキストを読む→漢字ドリルの魚見のページは全部読むことができるように。

・書きの困難

Bの場合「書きに困難はあるが、想像力は豊か→「お話しづくり」スライド

Cの場合 耳からの情報よりも、視覚情報の方が入りやすい パワーポイントで絵文字

構造化を図ることで、1日の流れや学習の見通しを持てるようにする。

Dの場合 場面緘黙→「たすく」ボイス

Eの場合 場面緘黙→Minecraft Education Edition

パワーポイントでボタンを押して声をかけたり、筆談したり、たくさん頼むようになる

→生徒個々の状況に応じて、さまざまなAT(支援テクノロジー)ソフトを利用して支援する。

支援例: パワーポイントに和太鼓ソフト(音声読み上げ)を挿入、「たすく」ボイスソフト通常学級でも、連絡事項を撮影できるようになる。

##### 課題:

- ・支援学級担任が代わっても、同じ支援を継続できる体制づくり。
- ・支援もずっと同じではなく、成長に合わせて柔軟に変化させていくこと。
- ・家庭でも使えるよう、保護者にも ICT活用についてこまめに連絡を取り合うこと。
- ・通常学級や学校でのユニバーサルな環境づくり。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

学内にも発達障害とみられる学生が見受けられる。音声読み上げや、文字認識ソフトなど支援テクノロジーソフトの活用などの啓蒙も、本学のFD活動に取り入れることは可能ではないか。

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	大学教育学会
企画名称・テーマ	大学教育学会第39回大会
開催日・会場	2017年6月10日(土)～6月11日(日) 広島大学総合科学部
参加者所属	歴史学部 歴史学科

### 参加報告

#### 【研修会の趣旨】

91年の大綱化以降、専門教育重視によって教養教育の本来的な存在意義が見失われつつあり、しかもその実施体制の弱体化が指摘されている。このような状況にある教養教育について、その在り方を現代的課題を踏まえながら議論する。

#### 【研修会の概要】

例年と同様、統一テーマに基づいたラウンドテーブル（RT）、基調講演、シンポジウム（いずれも 10日開催）と自由研究発表（11日開催）という構成で行われた。

出張者は、RT「新しい時代の教養教育のコンテンツとコンピテンシー」、基調講演、シンポジウム、及び研究発表部会6「初年次教育（1）」、部会15「教学IR・学習成果測定（2）」に出席した。

教養教育に関するRT・講演・シンポでは、理念的な「教養」論ではなく、いかに教養教育をいかに展開していくのか、そのために何が必要かが主要テーマになっていた。また研究発表では、関西大学が行っている内部質保証・教学 IR の取り組みが参考になった。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

いずれのテーマも本学が喫緊に取り組まなければならないテーマばかりである。特に教養教育においては、その実施体制の確立と共に、教養教育の中身の議論を深めなければならないと感じた（特に授業方法は、もはや講義型ではなく、能動的なものとしていく必要がある。それによって、履修可能単位数も減っていくであろう）。

また教学IRは、各大学の人的資源の問題に負うところも大きいですが、やはり組織的に、なおかつこの面に専門的な知識を持った研究者を配置する必要を感じた。その点では、関西大学の取り組みも参考になる。

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	私立大学情報教育協会
企画名称・テーマ	平成29年度ICT利用による教育改善研究発表会 ICT利用による教育改善研究発表会
開催日・会場	2017年8月9日(水) 東京理科大学 神楽坂キャンパス
参加者所属	教育学部

### 参 加 報 告

#### 【研修会の趣旨】

ICTを利用した教育改善の取り組みと効果を公表し、アクティブ・ラーニングによる教育方法の改善と学修成果の可視化など、教育の質的転換に向けた課題の解決策を示唆する。

#### 【研修会の概要】

分野別の研究発表。

10:00～別紙の情報基礎・情報専門・語学・芸術・初年度・環境グループの「ICT基礎への関心を呼び覚ますための授業力法の改善」「eラーニングを活用した授業システムの構築と運用」「LMSを活用した主体的な学修を促進する授業の提案と実践」に参加

11:10～社会科学・幼児教育・人文科学・地域グループの「地域社会との連携参加体験型授業を通じたアクティブ・ラーニング」「ICTを活用した学習による地域活性化の可能性:高校地歴科教科教育との連携を視座に」「解答やレポート作成過程の時間分析の研究」参加

#### 【本学のFD活動における検討課題】

- アクティブ・ラーニングで、地域との連携の過程で、中間支援組織の役割を検討し仕組みを構築する必要性
- タブレットや時間分析ソフトを利用した通信教育における学生のレポートや試験の作成、担当者の添削、実習日誌の作成にかかる時間分析の可視化の検討
- Screen Castの利用による反転学習の検討。You TubeやアマゾンのWebサービス上のMoodleを利用した予習学習の検討

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	東京都市大学
企画名称・テーマ	大学教育再生加速プログラム(東京都市大学第1回APシンポジウム) 改めて、「社会に通用する」学修成果とその評価を考える
開催日・会場	2017年11月17日(金) 東京都市大学 世田谷キャンパス
参加者所属	教育学部 教育学科

### 参 加 報 告

#### 【研修会の趣旨】

大学教育の質保証が求められる現在、学生の成長をどのようにサポートし、また、それらをどのように評価していくのかについて、実践報告やパネルディスカッション等により理解を深める。

#### 【研修会の概要】

- 基調講演「学習者の成長と大学教育の質保証—大学教育再生加速プログラムを通じて—」  
河本達毅(文部科学省高等教育局大学振興課)
- 事業報告「東京都市大学におけるAP事業の取組—学びの足跡の見える化による卒業時の質保証—」  
永江総宜(東京都市大学教育開発機構 副機構長/教育開発室長)  
「ブレ・ディプロマサプリメントによる学生のキャリア形成と成長支援に向けて」  
住田曉弘(東京都市大学教育開発機構教育開発室員)
- パネルディスカッション  
河本達毅、寺島求(東京都立西高等学校主幹教諭)、豊田義博(リクルートワークス研究所主幹研究員)、藤原雄彦(沖電気工業)、湯本雅恵(東京都市大学副学長/教育開発機構長)、山下仁司(大阪大学高等教育・入試研究開発センター教授)  
※AP: Acceleration Program for University Education Rebuilding

#### ●基調講演

##### <学習(修)成果>

・学生の視点にたった教育への転換、「何を教えるのか」よりも「学生がそのカリキュラムによって、どのような能力が身に付くのか」が大切。そのため、学生が専攻分野にかかわらず共通に身に付けるべき学習成果を明確に示すこと、学習成果の達成を目指した教育内容・方法の充実改善を図ることが強く求められている。

##### <学修成果に基づく内部質保証>

・学修目標の明確化→主体的な学びの促進→汎用的能力等の伸長→学修成果の把握→教育成果の発信→不断の教育改革というサイクルが大切である。

##### <ディプロマ・サプリメント>

・我が国の文脈(雇用慣行、教育システム、大学システム)に沿った形で、日本版ディプロマ・サプリメント(仮称)が開発できないか。

→学修成果×内部質保証×アカウンタビリティ×学生支援

#### ●事業報告

##### <東京都市大学におけるAP事業の取組>

・「卒業時の学生が、その点において社会(企業)から、実際にどのような評価を受けているか」と「卒業生が就業後5年、15年経って『社会への通用性』をどのように自己評価しているのか」の分析。

・学修成果(学生の成長)を具体的にどのように評価していくかについて、成長要素(リテラシー基礎力、コンピテンシー基礎力、語学力、基礎学修力、専門学修力、専門実践力)の指標化を図ること、学修成果の可視化(ブレ・ディプロマサプリメント<全体詳細版>、ディプロマサプリメント<最終評価版>)を目指している。また、客観性、妥当性、活用方法の検証に取り組む(アセスメントポリシーとして整理・検討中)。

・ブレ・ディプロマサプリメントとして、定性情報と定量情報、キャリアポートフォリオ機能を年次毎に提示する(卒業時にディプロマサプリメントを提示する)。

#### ●パネルディスカッション

・学生が「自分が選べる力」を身に付けることが大切ではないか。(河本)

・若手社員が育ちにくい。企業の実態から求められるものが大きい。ある程度、環境適応性の能力がないとやっていけない。(豊田)

・リテラシーやコンピテンシーの評価の妥当性はどうか。蓋然性が問題。(藤原)

・評価を学生自身がどのように受け止めているのが大切(自分で語れること)。(豊田)

#### ●その他

・AP事業1年目のため、成果よりも今後の取組内容が中心ではあったが、それでも、これから各大学において求められること(考え方や方法)が、多く含まれており大変参考になった。

参加者も多く、質疑応答も積極的に展開され、大変盛況なシンポジウムであった。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

当該校はAPの取組1年目ということもあり、まだまだ成果発表というよりは取組の経過報告(方向性の提示)に止まっていると思った。しかしながら、先を見据えて、計画立てられていること、教職員が一緒になって目標に向かって進んでいる姿勢は大変素晴らしいと感じた。本学においても、こうした先進校の取組を参考にしてできることから改善していく必要があると考える。

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	東京電機大学
企画名称・テーマ	東京電機大学大学教育再生加速プログラム(AP)フォーラム テーマⅠ(アクティブ・ラーニング)・Ⅱ(学修成果の可視化)複合型中間成果報告
開催日・会場	2018年2月15日(木) 東京電機大学 東京千住キャンパス丹羽ホール
参加者所属	歴史学部 歴史学科

### 参 加 報 告

#### 【研修会の趣旨】

東京電機大学が採択された大学教育再生プログラム「テーマⅠ(アクティブ・ラーニング)・Ⅱ(学修成果の可視化)複合型」について、進捗状況の中間報告。

#### 【研修会の概要】

APプログラム推進の責任者である 2 名(汐月哲夫氏・工藤一彦氏)の報告、および東大・栗田佳代子氏によるアクティブ・ラーニングの方法および効果に関する講演から構成されていた。

汐月氏の報告は、APに関連する物身のALの実践例と、成績評価の可視化に向けての取り組みが紹介された。また工藤氏の報告では、東京電機大学のvalueルーブリック作成の取り組みを中心に学修成果の可視化に向けての各種方策が紹介された。本学と同じLMS(gakuen)を使用されていて、ポータルサイトの活用方法に関する方向性に関して興味をひかれた。

栗田氏の講演は、授業内容に応じた効果的なALの活用方法が実例を通じて報告され、実際の授業にどのように活用できるかのヒントを得た。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

APという補助金による事業という性格にもよるのではあろうが、何とか成果を形に仕上げようともがいておられるような印象を受けた。それ自体決して悪いことではなく、一定の見識をもって推進しておられるのは十分にわかるが、「アクティブ・ラーニング」や「学修成果の可視化」が最終目標になっていて、先進事例を取り込んで何とか「形」にすることを目指しておられるようである。この傾向は、翌日に参加したシンポジウムでの事例報告でも垣間見られた。

補助金を有効に使えるのなら良いとは思いますが、「当たってしまったから」何かをやるというのでは、AP事業の本質から離れるのではないか。本学のように必ずしも大学教育改革の「強力な推進者」がいない大学では、補助金によるのではなく、地道に教学改革に取り組むのも一つの方向性だと考える。

とりあえず本学では、現在の大学教育における、「カリキュラムとは何か」「シラバスとは何か」「成績評価をどのように行えばよいか」ということを、着実に定着させていくのも一つの方向性ではないかと考える。

また栗田氏の講演は、ALの様々な手法や考え方をワークもまじえて話していただいたので、今後の授業展開でのALを行う際の参考になった。ALを行うのが目的ではなく、ALで学生がどのような力を付けられるのかが重要であることを再確認した。こういう点を、FDを通じてもう一度確認するのも必要だと考える。

最後に、東京電機大学のAP事業は、大学単位ではなく、未来科学部という学部が中心に行っているものだと、同席した同大学の先生から教えていただいた。本学でも、先進的な学部を中心に、改革事業を積極的に行うのも一案ではないかと考えた。

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	北九州市立大学および大学教育再生プログラム テーマⅡ・Ⅴ採択校共同主催
企画名称・テーマ	大学教育再生加速プログラム(テーマⅡ・Ⅴ)共同シンポジウム 高等教育に求められる質保証を考える —学修成果の可視化による教育改善と卒業時の質保証—
開催日・会場	2018年2月16日(金) 品川THE GRAND HALL
参加者所属	歴史学部 歴史学科

### 参 加 報 告

#### 【研修会の趣旨】

APの各テーマ採択校の共 開催のシンポジウムであり、各大学それぞれの視点による発表・意見交換を通じて現状と展望を共有し、今後の採択校の取り組みの進捗を図るとともに、高等教育の改革を一層進める契機となることを目指す。

#### 【研修会の概要】

本シンポジウムは、昨日の東京電機大学の報告とは異なり、同一テーマでAP事業に採択された複数の大学による共同の成果報告会であった。

基調講演として濱名篤氏(関西国際大)と吉田文氏(早稲田大)による「質保証」をめぐる概括的な報告があり、その後、AP採択校による事例報告(4件)があった。それをうけて最後に、パネルディスカッションによる質疑応答と問題の集約が行われた。

共通して問われたのは、何を「質保証」するのか、そのためにどのような「可視化」を行うか、であったように感じた。

なお昼食休憩の間に、ポスターセッションによって、各大学の取り組みの事例報告も行われた。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

濱名・吉田両氏の講演からは、「質保証」(外部・内部を含む)とそのため「可視化」という二つのキーワードについて、受け取り手がそれぞれのイメージで考えている部分が多く、もう一度その意味内容を問い直す必要があるのではないかと考えた。特に第3期の認証評価で問われる「内部質保証」がいかなるものか、これを再確認したうえで、点検評価を行う必要があるのではないかと考える。このテーマは一見FDとは直接関係しないようにも見えるが、大学の教育の「質」そのものを問われると考えれば、この機会にFD活動の一環として行うべきだと考える。

一方各採択校の事例報告では、さまざまな観点から真剣に取り組まれている様子はわかるが、それが果たして(たとえ小規模校であったとしても)大学全体の意思決定として取り組まれているのか疑問に思える部分もある。本学のような、ある意味中途半端な規模の大学では、大学全体を取り込むのか、または理解のある一部学部を先行事例とするのか、難しい部分もあるように思える。

ただいえることは、いまや改革志向の大学はどこでも行っているようなことは、早急に本学でも実行していかなければならないということである。本年度よりシラバスチェックは始まったが、これを軌道に乗せて、これを切り口として授業の改善を図ること。これは必須であるが、さらには成績評価に関わるGPAの導入、カリキュラムの全体構造を可視化するカリキュラムマップやカリキュラムツリーの策定(その前提ともなる「履修モデル」の策定も含む)、これらは31年度カリキュラム改革では是非とも導入すべきである。これらは「可視化」や「質保証」の基本部分である。その意味で、国家の政策誘導という部分ではなく、大学の存立そのものに直結する、今や必須のものである。この点も、FD活動を通じて、各教職員に周知していくべきだと考える。

## FD関連研修会 参加報告書

主 催	玉川大学
企画名称・テーマ	玉川大学APフォーラム2017 「教職課程におけるアクティブ・ラーニングと学習成果の可視化」
開催日・会場	2018年3月7日(水) 玉川大学 大学教育棟2014 602教室
参加者所属	教職支援センター

### 参 加 報 告

#### 【研修会の趣旨】

これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上については、「子どもたちに、知識の習得のみならず、これらを活用して子どもたちが課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力及び主体的に学修に取り組む態度を身に付けさせなければならない。」その際、教員には、課題の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び(アクティブ・ラーニング)の視点に立った指導・学習環境の設定やICTを活用した指導など、様々な学習を展開する上で必要な指導力を身に付けることが求められる。

#### 【研修会の概要】

- ア 基調講演「アクティブ・ラーニングをどのように推進するのか」  
玉川大学大学院教育学研究科・教育学部教授 森山 賢一氏
- イ 事例報告 実践フィールド校における「主体的、対話的で深い学び」の取組  
独立行政法人教職支援機構次世代型教育推進センター研修協力員  
稲岡 寛氏(秋田県・小学校)  
織田 克彦氏(千葉県・高等学校)  
宮迫 隆浩氏(鹿児島県・中学校)
- ウ 講演「教員養成課程におけるアクティブ・ラーニングと学修成果の可視化」  
玉川大学教育学部 准教授 菊池 重雄氏
- ア～ウでは、アクティブ・ラーニングが必要とされる背景やその基本的概念が示され、またそれに基づく小・中・高等学校における具体的な実践研究が報告された。その小・中・高等学校の実践研究における共通点として、「i 体のアクティブ化から、頭もアクティブ化へ ii 形だけの振り返りから学んだ手応えの自覚へ iii 本時レベルから単元レベルの学びへ」が挙げられていた。
- さらに、大学の教員養成課程におけるアクティブ・ラーニングによる授業改善の実践例では、この技法を積極的に取り入れることで学生の多くは主体的・対話的な学びが実践できるように変容してきたことが報告された。

#### 【本学のFD活動における検討課題】

「アクティブ・ラーニング」は、平成24年中央教育審議会答申「新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け、主体的に考える力を育成する大学へ～」において、大学教育の質的転換を求めて提唱された言葉であるが、今回の小・中・高等学校の学習指導要領の改訂に給いても、「主体的・対話的で深い学び」(アクティブ・ラーニングの視点)による授業の改善が一つの柱となっている。

教職を学ぶ学生にとっては、「学部生としての学びにおけるアクティブ・ラーニング」だけではなく、さらに「教員として『主体的・対話的で深い学び』による学習指導ができる」資質・能力を教職課程において身に付けることも求められる。

本フォーラムの講演のなかで、教職を目指す学生の中でも、授業の中で他の学生とコミュニケーションをったり協働したりする場面を苦手とするものもいることが報告されていた。(しかし、数をこなしていくと少しずつ改善されていくようであるが)そうした学生には なおさらこうした機会が必要であろう。

本学においても、教職課程を履修し、さらには教職を目指す学生が数多く在籍するが、教職課程において、先の資質・能力を育成するような授業内容も含めていくように改善していくことが不可欠であると考えられる。

私が現在担当している「中等教育実習研究」等においても、このような視点において授業内容を見直していきたい。



2017 年度「教員研修会」  
「学外 FD 関連研修会 参加支援」報告書

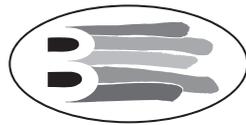
発行 日：2018 年 9 月 25 日

発行 者：佛教大学教育推進部教育推進課

〒603-8301 京都市北区紫野北花ノ坊町 96

TEL (075) 491-2141 (代)

URL <http://www.bukkyo-u.ac.jp/>



BUKKYO UNIVERSITY

